

集められたデータから 新たな事実を発見する よろこびは、 テレビゲームで遊ぶより はるかに面白い。

政治とサイエンス。この2つを皆さんだったら、どう結びつけるだろう。ここに、集められたデータをもとに事実のみを導き出す「政治科学」という領域がある。先生は、学べば学ぶほど増してくるその面白さを通して、新聞すら読まず政治にほとんど関心がなかった学生と選挙を、そして政治を結びつけ、やがて夢中にさせてしまつ。政治に意見を言うのではなく、新たな事実のみを追い求める「テレビゲームより面白い」と先生自らが語るその研究の世界を、ワクワクしながらのぞいてみよう。

綿密なデータから、 次の選挙結果を予測する 科学としての政治学

母国アメリカでも教鞭を執っていたリード先生に、日本とアメリカの政治学の違いについて訊くと、次のような答えが返ってきた。

「日本の政治学は、あるべき姿の話をしますが、(先生が研究する)アメリカの政治学では事実関係のみを取り上げます」

この言葉の通り、先生は日本の政治について意見を求められても「評論はしない」という立場を崩さない。

お話を伺ううち、日本中の話題を集めるある知事について話を向けたが「それは哲学者に訊いてください」と笑顔で返されてしまった。

それでは「事実関係のみを研究」という、主にアメリカで主流の政治学とは、どのようなものなのか。リード先生の専門である日本の選挙と選挙制度について訊いた。「アメリカの政治学は、統計学や数学なども使いながら、実際に起こっている事例を分析したり予測したりする『政治科学』です。その研究のなかで『小選挙区は2大政党制になる』という法則があるんですが、実

際に日本でもこの法則通りの結果になりました」

先生が言われたのは、初めて日本に小選挙区比例代表並立制が施行された1996年の衆議院議員総選挙後の政治状況の変化についてだ。

先生はこのとき「3回目の選挙までに2大政党制の形が見える」と予測した。マスコミは否定したのだが、実際に3回目となる2003年の衆院選では、自由民主党237議席に対し民主党も177議席を獲得し、両党の議席数は全議席の8割を超えた。確かに2大政党制の形が見えたのだ。

この選挙予測が「政治科学」である理由は、綿密なデータ分析にある。リード先生は、全国の各年代の選挙結果が収められた自身のパソコン画面を見せながらこう説明する。

「1949年からの選挙結果は全てデータベース化されています。その分析から導き出されるのは、政権交代がいつあって、その時点でどんな政治的な特徴があったか。特に日本で言えば、与党に対する国民の怒りがある、その批判票の受け皿となる政党が存在するという2つが、権交代の条件として挙げられます」

実はリード先生は、この15年間で



REED, Steven (リード すていーぶん)

アメリカ・インディアナ州生まれ。

大学卒業後3年弱の間徴兵により軍に入隊。約2年間日本で勤務し、帰国後大学院に入学。1979年7月ミシガン大学大学院政治学研究科博士課程修了。アラバマ大学助教授、同大学教授を経て、1993年、中央大学総合政策学部創設と同時に教授となり、現在に至る。アラバマ大の教授時代にハーバード大学やワシントン大学でも教鞭を執る。専門分野は比較政治学で、現在の研究課題は「日本の選挙と政党」。

行われた衆院選挙についても「日本国民が一番求めているのはリーダーシップ」というデータ分析上の観点から予測を始めたのだが、その内容は、あたかも結果が既に出ているかのように明解だった。

自分はこのをやったという
確かな達成感を得て
卒業できる

このような「政治科学」の手法は、
実際の授業ではどのように展開され



全国の衆院選挙区がひと目で分かる地図。

るのだろうか。政治学の入口ともいえる「政治と社会」の内容について語ってもらった。

「自分の住む選挙区に関し、有権者の選択肢となる候補者についてA4用紙2枚にレポートさせます。予測はさせないですよ、予測には理論が必要で、この時点で学生は十分に学んでいませんから。

若い人たちが投票しないのは世界各国共通の問題ですが、理由は『自分の選挙区について知らないから』です。その因果関係は繰り返し様々な方法で証明されています。候補者の情報を知れば投票に行く確率は高くなります。ちなみに、このレポー



英語で書かれた著書のテーマは、ほとんどが日本の選挙と政治制度だ。

トを書いた後で必ず『すぐ投票に行きたい』という学生が現れます」

もちろん各自の選挙区の状況は全てリード先生の膨大な選挙データベースから提供される。学生はこのレポートを通して選挙データにふれ、そこから何かを導き出す楽しさを学ぶ。なかには、興味を通り越して、自らの選挙区について怒り出す学生もいるそう。それだけ先生の授業のインパクトは強い。

また、「日本の高校生は新聞を読まないから、大学生になっても読む習慣がない」と語るリード先生の授業では、その日の新聞記事に「政治科学」の理論を交えた解釈も行われる。

「新聞を読まない人が投票しないのは当然の話です」と語る先生の授業で「新聞を読む」ことは基本中の基本だ。

しかし、リード先生のゼミは、必ずしも政治のみがテーマではない。「私はデータを集めて分析することを教えています」

先生のこの言葉通り、本年度の卒論に限っても扱われるテーマは幅広い。

「出生率をテーマにした学生は、出生率の低下を改善したフランスやスウェーデンについて、問題の発生し始めた時期と、それに対する政策、そしてどのような成功を収めたかを統計学の理論なども使って研究中です。

また、農業問題を扱う学生は、農林水産省の食料自給率データを参考にしつつ、外食産業が手がける農業システムなど国内の成功事例を取り上げています。

もう一人は政治がテーマです。愛知県豊田市（トヨタ自動車）・茨城県日立市（日立製作所）・栃木県矢板市（シャープ）のいわゆる企業城

下町3市を対象に、地方紙の記事に基づいて支持率の地理的分布を時系列的に分析しています」

それぞれにテーマが違ってもデータを集めて分析する」という点はゼミ共通なので「互いのテーマに興味をもつて質疑応答し合う雰囲気が生まれます」とリード先生は言う。

学生がゼミを終えて卒業するとき、先生にとって一番うれしい瞬間がある。

「卒論を書き終えたことよって『私は卒業する資格があると思います』と充実感をたたえた表情で言ってくれたときですね。私が『達成感がありましたか？』と訊ねると、本当にいい顔をしてくれますよ」

もちろん、その達成感は就職活動にも好結果をもたらす。

「面接では、4年間の学生生活で何をやってきたかを必ず訊かれますね。このとき重要なのは中身より答え方なんです。覚えたセリフをしゃべるような方法はあまり感心しません。私のゼミでしっかり研究を行った学生は『私はこのテーマで研究し、

これが分かった。私の話をぜひ聞いてほしい』と自分の言葉で明るく積極的な姿勢で話せるので、人事担当者記憶にも残り希望企業への就職がかなうケースが多いのです」

自分だけが見つけた分析結果が心に残る

「データを集めて分析する」リード先生の研究が、それだけ強く学生に影響を与えるのはなぜか。先生に研究の醍醐味を聞いた。

「データを分析するなかで、1つでも何か発見できたら方法が分かるんです。それは、本を読んでできる体験ではありません。自分で分からないから分析して、誰も知らない相関関係を発見できたとき、興奮に近い喜びを味わえるんです。そこには受験勉強や高校の勉強

とは全く違う、学びの世界があります。確かにデータを集めているときは、特に面白くはないし苦労があります。だからこそ自分だけが見つけた分析結果に対する達成感が大きいのです」

リード先生が指導するそうした研究の価値を一言で言い表すキャッチフレーズがある。それは、



ときには一対一で行われる卒論指導。もちろん、意見交換の土台となるのは、データだ。そして、閲覧できる全世界のデータが対象になる。



学生に達成感を与えられることが、リード先生の喜びだ。

「『データ分析は、テレビゲームより面白い』というも私は言っています。テレビゲームとの大きな違いは『残るものがある』ということですよ。自分の心のなかにも残りますし、事実として残ります。事実だから誰も反論できないし、単なる意見ではないから議論に勝つこともできます」

リード先生が指導する研究の楽しさは、先生ご自身が「研究が面白くしょうがない。純粋に楽しんでいきます」と言うように、自分もその喜びを味わってみたい、と思わせるに

十分だ。

先生が日本の政治を研究するきっかけとなったのは、徴兵されて偶然日本に配属になったこと。軍隊から少しでも離れようと日本人とつき合うなかで、一生懸命勉強した日本語が日本との結び付きを決定づけた。

その後、大学院で「比較政治」を本格的に研究し始めたとき「日本語ができるなら、日本の政治について研究できる」と考えたのだ。そこで1993年に日本に来て以来、日本の政治状況を研究し続ける理由を訊ねたらこんな答えが返ってきた。

「出来事が次から次へと起きて、分析する価値のある政治状況が、どんな生まれからかです」
確かに揺れ動く日本の政界は、リード先生に絶好の材料を提供してくれそうだ。だから

からこそ、先生自身の研究テーマも複数存在するが、そのなかに組織票（選挙で各種団体の組織が特定の候補・政党に投じる票）の研究がある。組織票といえ、最近では弱体化しつつあると聞くのだが、先生はきっぱりとこう言い切った。

「それは単なるお話のレベル。まだデータに基づいた分析はされていないので、ぜひ最初に調べたいと思っています」

そのときのリード先生の毅然とした表情からは、「政治科学」としてデータ分析を専門的に手がけてきた自信と誇りが伝わってきた。

高校生の皆さんへ

「高校時代に、これを勉強しなさいと言われるのは当然のことです。ただ大学に入ってから、先生から指導されるのではなく、自分の勉強したいテーマは自分で選んで勉強してほしい。総合政策学部では、それができる権利が皆さんに与えられています」

リード先生から皆さんへのメッセージは、こんな言葉から始まった。そして、リード先生はさらに積極的な姿勢を、と呼びかける。
「推薦入試の面接でこんな質問がありました。」

『本当に先生と研究室で話せるんですか？』

これに対しては『私はもちろん、一般論としては、どんな先生もいつでも相談に乗ってくれます』と仰りたいのです。私は、自分のゼミの学生に対し、質問によっては『そのテーマなら、専門的に研究しているあの先生に訊いたらいい』と紹介しています。例えば原発の話であれば土木工学の先生がいる。政治学者に訊くよりも適任者が存在するテーマがあるのです。自分の専門について質問に来られれば、どの先生も喜んで迎えてくれますよ。だから積極的に研究室を訪ねて話してほしいと思います」

皆さんの興味をしっかりと受けとめてくれる先生たちが、総合政策学部には揃っているということだ。